

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720085

研究課題名(和文) 書跡資料の調査分析を中心とした付合文芸の諸相に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Linked Verse Various Aspects which Focused on Survey Analysis of Handwriting Data

研究代表者

尾崎 千佳 (OZAKI, Chika)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50335759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：西山宗因の短冊・色紙・懐紙について現存するすべての真蹟資料の書誌調査を実施し、メタデータを採取して西山宗因真蹟資料データベースを構築した。データベースに基づいた成果を『西山宗因全集 第5巻 伝記・研究篇』(2013)「宗因書影」「西山宗因年譜」に発表した。『西山宗因全集 第6巻 解題・索引篇』には「現存西山宗因真蹟一覧」(2014印刷中)が掲載される予定である。あわせて、宗因自筆卷子本・宗因書写本・宗因評点資料について原典調査を実施し、書誌的観察を反映した論考を発表した。

研究成果の概要(英文)：Bibliographic investigation about all the existing handwriting data of the Nishiyama Soin was conducted, metadata was collected and Nishiyama Soin handwriting database was built. The result of research based on the Nishiyama Soin handwriting database was published in "Nishiyama Soin Complete Works". Furthermore, the papers based on analysis of the Nishiyama Soin handwriting data were also published.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本文学 連歌 俳諧 西山宗因

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、研究開始当初、近世初頭に活躍した連歌師西山宗因(慶長10年1605-天和2年1862)に関する研究成果の蓄積を背景として、連歌という文芸が、武家社会の秩序に深く根ざすという思いを強くしていた。連歌師は、武家組織の外部にありながら、その組織構造の継承や機能向上を期待された存在として、家督祝儀や門葉繁栄祈願などの目的で賦される連歌を主導していたと考えたのである。

不特定多数の読者に開かれてある近現代の詩歌とは異なり、連歌という文芸は、きわめて具体的かつ限定的な場であって、人と人とを繋ぎ、その関係性や集団の秩序を確認するという、応接の具としての機能を有していたことを重視しなければならない。

情報の断片性や雑多性ゆえに従来は顧みられることの少なかった、短冊・色紙・懐紙といった書跡資料こそ、連歌・俳諧という付合(つけあい)文芸の研究にとっては根本資料であるとの問題意識のもと、本研究課題を構想した。

2. 研究の目的

本研究課題「書跡資料の調査分析を中心とした付合文芸の諸相に関する研究」は、研究代表者が過去10年の間に蓄積した連歌師西山宗因の研究を基盤としつつ、武家社会の秩序のなかに占める連歌文芸の位置を確かめ、連歌・俳諧という付合(つけあい)文芸の持つ応接の具としての機能に着目するというより広い立場に立ちながら、宗因研究のさらなる深化を目指すものである。

その際、付合文芸が人や集団の関係性のなかでこそ意義を有するという視点を活かすべく、贈答のために制作・染筆された自筆資料全般を調査の対象とし、個々の資料のやりとりされた場や、その場において示される言説の意義について分析することとした。

3. 研究の方法

(1) 短冊・色紙・懐紙の調査分析

西山宗因真蹟資料のすべてについて、網羅的なデータベースを構築する。『西山宗因全集』編纂の過程で収集した資料を整理し、未見の資料については及ぶ限り原典調査を実施し、過去に発刊された古書目録を点検する。データベースは、当該書跡の料紙・法量等のメタデータを必須事項とし、及ぶ限りデジタルデータを添える。そのうえで、詞書や他出等によって当該書跡の献上主を推定し、書誌学的考察を盛り込みながら、句の詠まれた場や状況等についての分析を行う。

(2) 書簡を含む評点資料の調査分析

宗因の評点資料については、すでに『西山宗因全集 第4巻 紀行・評点・書簡篇』に46編を翻刻済みであるが、その後新たに、元

来評点資料の一部であったと思しき宗因書簡や書き付けの類が複数発見された。それらを所蔵する諸機関・個人に依頼して調査を実施し、書誌およびデジタルデータの収集を行う。あわせて、過去に発刊された古書店の売立目録を点検し、同種の資料がないか確認する。従来、宗因にとって俳諧はあくまでも余技であるがゆえに、一部の俳論も残さなかったと考えられてきたが、具体的な個人に宛てた実作指導の場においては、自身の俳諧観を吐露することもあったことなどをふまえて、収集した評点資料の分析を進める。

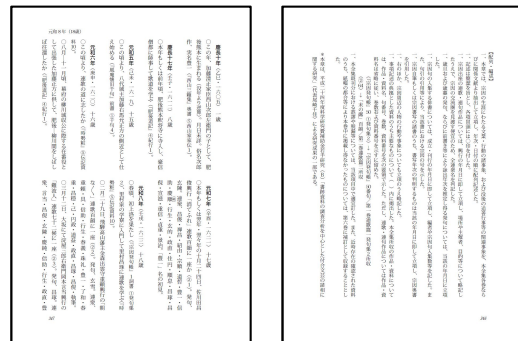
4. 研究成果

(1) 西山宗因真蹟資料データベースの構築

西山宗因の短冊・色紙・懐紙について、現存するすべての真蹟資料を実見し、歌句・署名・所蔵者・出典・書型・装訂・法量のメタデータを採取した。また、一部を除きデジタルデータを収集した。所蔵者もしくは所在が不明で原典の調査に及ばなかった場合は、古書目録・図録などから部分的にメタデータを採録した。

該データベースにもとづき、連歌・俳諧の懐紙6点、連歌懐紙2点、書簡3点、書写本5点を精選し、八木書店刊『西山宗因全集 第5巻 伝記・研究篇』(2013)の口絵に「宗因書影」として掲げた。また、該データベースのメタデータを抽出し、短冊・色紙・懐紙・書簡・卷子本・冊子本に分類した「現存西山宗因真蹟一覧」の草稿を完成した。同稿は2014年度刊行予定の『西山宗因全集 第6巻 解題・索引篇』(2014印刷中)に収録することが決定している。

また、該データベースの構築によって得た作品の成立年代の推定結果は、『西山宗因全集 第5巻 伝記・研究篇』所収の「西山宗因年譜」に反映した。当年譜は、瀬原退蔵「西山宗因年譜」(『俳諧史の研究』、1933、星野書店)の後を継いだ旧稿「西山宗因年譜稿」(『ビブリア』111、1999)を大幅に増補・改訂したもので、宗因自筆もしくは宗因書写の諸書のうち書写年次の判明するものは宗因奥書を引用して立項した。宗因年譜の決定版として学界に貢献している。



『西山宗因全集 第5巻 伝記・研究篇』
「西山宗因年譜」凡例および冒頭

(2) 書跡資料をめぐる各論

西山宗因真蹟資料データベース構築の過程で特に問題を見出した書跡資料については、調査・分析を進め、論文等として公表した。書跡資料を検討の対象とし、活字テキストからは得られない書誌情報に注目することで、作品の成立や享受の様相をより具体的にうかがいあがらせることができた。

寛文2 3年(1662-1663)の奥州下向の体験をもとに書かれた宗因の奥州紀行には、5種の宗因自筆卷子本が伝わる。各伝本の書誌情報を整理した結果、その本文は無題本系と有題本系の2種に分けられることが分かった。両系とも『伊勢物語』東下りの趣向に大きく依拠して構想されているが、無題本系諸本が急逝した故郷の愛娘への追悼百韻で終わるのに対し、有題本系本文は正月の江戸の泰平を寿ぐ文辞で締め括られるという、著しい異同をはらんでいる。分析の結果、娘追悼百韻の前書きとして書かれ、それゆえ題を持たない無題本系本文こそ紀行の原型であり、磐城平藩主内藤義概献呈本と推測されること、有題本は、紀行成立から一定の時間が経ったあと、晴れの会席の床飾りとして飾られるに相応しく、祝言の結末に意匠を変えて二次的に成立したと推考した。以上につき、「東下りの変奏 宗因の奥州紀行をめくって」(『国語と国文学』88-5、2011)にまとめた。

八代市立博物館所蔵「談林六世像賛」は、宗因・西鶴・才麿・逸志・旧室・蒼狐の俳諧発句短冊6枚を貼りこみ、その下に上記6名の像を描いた掛幅装訂一幅である。製作者は江戸談林7世を自称した谷素外(享保19年1734-文政6年1823)で、本幅は、素外が自らの俳系を可視化し、その正統性を主張する目的で製作したものと考えられる。俳諧発句短冊がすべて談林6世の各自筆にかかることを検証し、各人の像容も信頼できる原画を忠実に写した可能性が高いことを明らかにした。本幅の紹介によって、江戸時代後期、江戸談林を標榜した人々が、宗因・西鶴・才麿等の真蹟資料を意識的に収集していた事実の一端が解明されたといえる。以上につき、「八代市立博物館新収「談林六世像賛」」(『上方文藝研究』8、2011)にまとめた。

伝西山宗因書写巻2巻を含む個人蔵『源氏物語』寄合書について、原典調査を実施した。該『源氏物語』は、同一の緞子表紙を有する綴葉装・54帖の揃本、三つ葉葵紋付の漆塗箱に収められて伝来する。添付の筆者目録によれば28名による寄合書で、外題は全帖とも八条宮智仁親王(天正7年1579-寛永6年1629)の染筆にかかるという。書写時期は筆者の生没年等に照らして寛永4年(1627)頃と推定される。里村南家の昌琢(天正2年1574-寛永13年1636)が桐壺巻を、同北家の玄仲(天正6年1578-寛永15年1638)が夢浮橋巻を書写するほか、里村家連歌師が書写者の過半を占める。宗因は里村南家に留学中、

昌琢の推薦によって書写の業に加わったものと推測される。筆者目録に西山宗因筆と記される紅葉賀・宿木両巻の筆跡を精査した結果、各巻冒頭部分には宗因の筆跡の特徴はほとんど認められなかったが、後半に及びに従ってその特徴が現出し、「庭」「和」「腹」「君」「声」「夜」「部」「泉」「の」「れ」「け」等の諸字体に、特に顕著な例を見出す。宗因筆跡の最古例として重要である。宗因が修行時代から大名特注の嫁入り本書写に従事していた事実も明らかになった。以上の分析結果について八代市立博物館に知見を提供し、同館平成24年度秋季特別展「八代城主・加藤正方の遺産」(2012)に該『源氏物語』を出品した。

(3) 宗因評点をめぐる各論

宗因の連歌評点資料16点、俳諧評点資料57点につき分析した。宗因自身の作品としては、連歌は俳諧の7倍近くも量産されており、連歌が宗因の本領であったことは明らかである。いっぽう、宗因が他者の作品に加点した資料としては、上掲のごとく、連歌評点の3倍以上の数の俳諧評点が現存している。俳諧点業は連歌師宗因にとっても決して軽からぬ仕事であったと推測される。

かかる問題意識のもと、宗因の俳諧評点を時代順に精査したところ、加点にあつては百韻のおよそ半数程度に点を与えるという寛容な姿勢で終始一貫しているのに比して、加判姿勢は寛文中期(1666-1670)を境として著しい変化を遂げていた。その変化とは、式目違反を細かく指摘するような教条的な指導から、付句の趣向を積極的に評価し、作者が句作りの下敷きとした古典の名称を判詞において具体的に明示し、解説するという啓蒙的な指導への変化である。

かかる加判姿勢の変化が、大坂天満宮連歌所宗匠を一子宗春に譲ったと推定される寛文中期に顕著に認められることに注意したい。宗因の俳諧評の変化は、その生活形態の変化と何らかの因果関係があるのではないが、一代で身を興し連歌師としての地位を確立した宗因にとって、宗匠職の嫡男への早期委譲は、西山家を連歌の家として存続させるために必要な方法であったと思しい。俳諧点業は、引退後の宗因の重要な収入源のひとつであった可能性が考えられるのである。

連歌を本業とした宗因にとって、俳諧はあくまで楽しみであり余技であったとするのが従来の定説であったが、俳諧点業はむしろ副業であったと言うべきである。延宝期(1673-1681)に繰り広げられる貞門・談林の俳諧論争の発端も、連歌師宗因が俳諧点業に乗り出したことに対し、これを一種の領域侵犯と捉えた俳諧師たちが、激しく反発したことにあつたのである。

以上につき、「西山宗因の俳業」(『ことばの魔術師西鶴 矢数俳諧再考』、2014印刷中)にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

尾崎千佳、「山口の連歌と俳諧 宗祇から菊舎まで」展概要、やまぐち学の構築、査読無、9、2013、103-120

尾崎千佳、東下りの変奏 宗因の奥州紀行をめぐって、国語と国文学、査読無、88-5、2011、86-98

尾崎千佳、八代市立博物館新収「談林六世像賛」、上方文藝研究、査読有、8、2011、11-20

[学会発表](計2件)

尾崎千佳、歳旦 から 歳旦帖 へ 近世初期の歳旦をめぐって、平成25年度大阪俳文学研究会シンポジウム、2013年12月15日、財団法人柿衛文庫(伊丹市)

尾崎千佳、新撰菟玖波集と長門住吉社法楽百首和歌、第3回やまぐち学シンポジウム「大内氏と文化振興」、2011年12月17日、山口大学(山口市)

[図書](計3件)

島津忠夫・石川真弘・尾崎千佳他、八木書店、西山宗因全集 第6巻 解題・索引篇、2014、印刷中

篠原進・中嶋隆・尾崎千佳他、ひつじ書房、ことばの魔術師西鶴 矢数俳諧再考、2014、印刷中

島津忠夫・石川真弘・尾崎千佳他、八木書店、西山宗因全集 第5巻 伝記・研究篇、2013、1-301, 316-419

6. 研究組織

(1)研究代表者

尾崎 千佳 (OZAKI, Chika)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50335759